

門に立つ子ら (Ⅲ)
— 作品における孤児像 —

根本 橘 夫

門に立つ子ら (Ⅲ)

—作品における孤児像—

根本 橋 夫

はじめに

親のない子はすぐわかる
指をくわえて門に立つ
(俗曲より)

本研究は、種々の視点から孤児の姿を明らかにし、孤児に対するきめ細かな養護を保障し、また、彼らの自己洞察のための資料を提供することにより、孤児の幸福の確立を援助しようとする一連の研究の第3報である。

第1報では、孤児であり現在中年に達したT.S.氏の心理を、特に不安に焦点を当てて分析した。第2報では、孤児であるノーベル賞作家川端康成の自我の特徴を分析し、自我形成の諸要因を明らかにした。

本稿においては、種々の作品に表現された孤児の姿を通して、作者や読者の孤児についての暗黙ないし明示的な意識を分析する。

孤児を主人公とした個々の作品を分析した研究はあるが、本稿のような網羅的な研究は皆無であるので、資料的な意義も持たせ、できるだけ多くの作品を渉猟することとする。このために、作品の領域は問わない。また、印刷メディアに限らず、映画やテレビドラマ等の視聴覚メディアの作品も対象とする。さらに、世界的名作から無名に近い作品まで、幅広く取り上げる。

なお、純粋に孤児の境遇のみでなく、孤児に近い境遇が意味をもたらす作品も多いので、両者を含んで取り上げる。

人気の高い孤児の児童文学

2003年7月12日の日本経済新聞は、別刷りにおいて「子どもに読ませたい世界の名作」べ

ストテンを発表している。小学生の子どもがいる父母に、子どもに読ませたい世界の児童文学についてのアンケートをした結果である。調査方法は、インターネットにより、児童文学の名作55作品のなかから、各自5作品を選んだものである。有効回答数は1000名で、選ばれた作品と得票数は以下の通りである。

(順位)	(作品名)	(得票数)
1位	『トム・ソーヤーの冒険』 マーク・トゥエイン	(238)
1位	『十五少年漂流記』 ジュール・ベルヌ	(238)
3位	『赤毛のアン』 ルーシー・モード・モンゴメリ	(232)
4位	『あしながおじさん』 ジーン・ウエブスター	(211)
5位	『ハイジ (アルプスの少女)』 ヨハンナ・スピリ	(206)
6位	『星の王子様』 サン・テグジュペリ	(205)
7位	『ドリトル先生アフリカ行き』 ヒュー・ロフティング	(201)
8位	『エルマーの冒険』 ルース・スタイルス・ガネット	(198)
8位	『宝島』 ロバート・ルイス・スティーブンソン	(198)
10位	『アンデルセン童話集』 ホ・セ・アンデルセン	(189)

『トム・ソーヤー』『赤毛のアン』『あしながおじさん』『ハイジ (アルプスの少女)』など、孤児が主人公である作品が多く選ばれている。ちなみに、『トム・ソーヤー』の作者マーク・トゥエイン

ンは、『ハックルベリィ・フィンの冒険』でも孤児を主人公としている。『宝島』の少年には母親がいるが、スティーブンソンは、『さらわれたデービット』（坂井晴彦訳、福音館書店）において、孤児の少年を主人公にした物語を書いている。主人公は両親を亡くして大金持ちの伯父の家に引き取られるが、その伯父の悪だくみで、冒険の旅を強いられるというストーリーである。また、10位の『アンデルセン童話集』にも、『マッチ売りの少女』や『赤いくつ』など、孤児（ないしそれに近い境遇）の少女が主人公である有名な作品が含まれている。

後にあげるように、上記のベストテン以外にも、世界で広く読みつがれている児童文学には、孤児が主人公である作品が非常に多いのである。

明るくけなげ—その背後にあるもの—

『赤毛のアン』『ハイジ』『あしながおじさん』などにみられるように、児童文学における孤児は、明るく、けなげである。

この他、たとえば『小公女』は、父親が死んで、大金持ちのお嬢様仲間からも憧れの的であった地位から転落したセーラであるが、一貫してけなげで、誇り高さを失わず、最後には再び幸福な地位に戻る。

エリナー・ポーター作の『ポリアンナ』は、これをさらに強調した形で描く。19世紀末のアメリカを舞台にして、両親を亡くし、名家の叔母に引き取られた少女ポリアンナが、その天真爛漫で優しい性格から叔母の心を溶かし、街の人気者になっていくという物語である。心理学的用語として、ポリアナイズムという概念があるほどである。これは、自分や他者の敵意を完全に否定し、他者を信じきり、純粹無垢で、いつでも明るく、楽しく、可愛らしいという姿しか示さない心理傾向である。

この系列に属する男子版が『小公子』（フランセス・ホッジソン・バーネット作）である。両親を亡くした主人公セドリック（愛称セディ）が、祖父であるドリンコート伯爵にひきとられ、主人公のポリアンナの性格により気難しく孤独な祖父の心に人間的な温かみを取り戻させるというものである。なお、この作品では、セドリックの母親

も天涯孤独の美貌の孤児として描かれている。さらにバーネットは、『秘密の花園』においても、コレラで両親を亡くした少女メアリーを主人公としている。この少女はわがままに育ったが、両親の死後引き取られた伯父の家で、召使の感化等により、優しく思いやりのある性格に変わっていき、伯父の心をも解凍するというものである。

映画では、たとえば、スペイン映画『汚れなき悪戯』で、僧院で暮らす孤児の少年の汚れない心が自らの願いを現実化させていく姿が思い出される。

男子の孤児は、『トム・ソーヤー』や『ハックルベリィ・フィン』のように、腕白ではあるが根は優しい子どもとして描かれる。小説に映画に大ヒットしている『ハリー・ポッターシリーズ』の主人公ハリーも同様である。両親を失ったハリーが、魔法学校に入学し、腕白さや勇気を発揮しながら友情と冒険のなかで成長していく様が描かれる。『みなし子ハッチ』でも、ハッチは勇敢で友情に満ちている。

『さいならヘイちゃん』（中島ヒロ子作・今井弓子絵、岩崎書店）という子ども向けの作品がある。主人公のヘイちゃんという野生児が、率直で一本気な性格でクラスの人気者になるが、一人親の父親が死んでおばさんに引き取られていくことで物語は終わる。物語の展開中は孤児ではないが、その後のおばさんの家でのトム・ソーヤー的行動を髣髴とさせる。

TBSテレビで放映された連続ドラマ『キッズ・ウォー』では、両親を交通事故で亡くした明るく活発な男の子のような女の子が主人公であった。

最初から良い子として描くばかりでなく、悪い子から良い子へと変わる過程もまた格好の題材となる。これを描いた例としては、先にあげた『秘密の花園』のメアリーがあり、我が国では直木賞作家三好京三の『子育てごっこ』（文芸春秋）などがある。

映画『男はつらいよ』には、上で述べた男女双方の特徴が非常によく表われている。兄の寅次郎は、柴又では乱暴者だが外では心根の優しい人である。妹のさくらは、いつでも「良い子」であり、周囲の人々の感情の受け皿となっている。

孤児は、「良い子」でなければ生きていけない。そうでなければ、文字通り、誰からも相手にされない「孤児」として放り出される危険がある。『伊豆の踊り子』の有名な次の文章にも、このことが含意されている。

「二十歳の私は自分の性質が孤児根性で歪んでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に耐え切れないで伊豆の旅に出て来ているのだった。だから、世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは、言いようなく有難いのだった。」

孤児であるにもかかわらず、明るく、曲がることなく、けなげに生きる姿。そこに、人々は、子どもにこうあって欲しいという姿を見る。子どもに求める理想の姿が孤児のなかにあれば、それはいっそう鮮明な印象を与え、心を打つものとなる。

この背後には、孤児はひねくれて、暗い、悪い子どもという暗黙のイメージが前提として存在する。これによって、「孤児なのに素直で屈託がない」という主人公の姿が強く浮き彫りになる。作者はこの効果を意図しているのであり、少なくとも、無意識のうちに、こうした暗黙のイメージによりかかっている。アンケート結果に見られるように、孤児の物語を親が推奨し、また、広く読み継がれているのも、この暗黙のイメージを前提にしている部分があるのである。

孤児はひねくれて、暗い、悪い子どもという暗黙のイメージ。これは決して過去のものではない。たとえば、1995年3月30日の朝日新聞の投書欄に、中学生の女子生徒が、「平和をもたらす使節団」という学校行事でフィリピンの孤児院をたずね、それまで持っていた「孤児院は臭い、汚い、怖い」という偏見が変わった、という体験を投稿している。この女子生徒は直接の体験により偏見から免れたが、なお大多数の人は、こうしたイメージを保持している。

たしかに読者は、ある面で孤児と自分との同一化を感じとる。完全な家庭など存在しないし、家庭のなかで悲劇的と自分で感じる体験も一定程度避けられない。このような自分のなかに存在するものの極端として孤児の境遇があるのであり、このために、孤児に対するある程度の共感を持つ。とともに、それよりも自分は孤児ではないという

明白な安心感が存在する。この安心感こそが、ある程度孤児に同一化と共感を感じつつ、孤児を物語として楽しむ心の前提として機能しているのである。

対比

作品作りの原則の一つは対比である。したがって、これを中心的な設定として用いた作品もある。その典型は『小公女セーラ』である。彼女は大金持ちのお嬢様から、一文無しの孤児の地位に落ちる。

また、幸福をつかむ孤児は、しばしば市民的なささやかな幸福をつかむのではない。伯爵とか、大金持ちの相手との間で幸福になる。これもまた、孤児の哀れな境遇との対比効果を狙ったものである。

大人向けの作品では、よりリアルに描かざるを得ない。米・香港合作映画『上海1920—あの日見た夢のために—』という映画では、子どもの時に、上海の大富豪の息子と貧民街の孤児とが友情を結ぶ。15年後に再会した二人は、約束した会社を設立する。しかし、お互いの育ってきた境遇による考え方の違いにより、やがて意見が対立していくというストーリィを展開している。

ボアズ・イェーキン監督のアメリカ映画『アップタウン・ガールズ』は、共通性と対比という両方の要素を含んだ作品である。両親を失った子どもっぽいが行動力旺盛な少女モリーが、音楽プロデューサーの小生意気な娘レイのベビーシッターをするなかで、親の愛情に恵まれないレイの心が開かれ、二人が通じ合っていく過程をユーモアを混じえ、暖かく描かれている。

心の絆

親を失った兄弟は、年長者が下の子に親の代理をするなど、助け合って生きていかざるを得ない。兄弟姉妹の絆は、親がいる場合よりも強まるものと考えられている。

室生犀星『あにいもうと』は、幼くして両親を失った兄と妹のこうした深い絆を描いている。ここには、作者自身、9歳の時に実の母と生き別れるという孤児に近い境遇が反映されている。

ビクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』のジャン・ヴァルジャンは、早くに両親を亡くし、姉に育てられたという設定である。姉の夫がなくなり、姉とその子どもたちの生活が若い彼の肩にかかる。これが彼を不幸と苦難へと導く。また、この彼の生い立ちゆえに、孤児となったコゼットに愛情を注ぐのである。

米国の人気者ヒーローである『バットマン』は、バットマンとロビン少年がいずれも孤児である。バットマンは幼い頃悪者に両親を殺されており、これがロビン少年を身内の者のように思う心と結びついているのである。

こうした絆が、動物との交流という形で描かれる作品もある。身寄りのないもの同士、あるいは、親から引き離されたもの同士、心惹かれあうというものである。

ウィーダ原作『フランダースの犬』は、まさにこれを中心的な魅力として使用した作品である。アメリカ映画『フリー・ウィリー』では、里親に引き取られた孤児の少年と、家族と離れ水族館に閉じ込められているシャチとの心の交流を描いている。

新美南吉の『ごんぎつね』は逆に、孤児のごんぎつねの目を通して、親を失った兵十に対する共感という形で物語を展開している。

自立と幸福への旅

孤児を主人公とした作品で大きなテーマとなるのは、頼るものがない孤児がいかにして自分で世界を切り開き、幸福をつかみとっていくかである。

シャーロット・ブロンテは、『ジェイン・エア』で、孤児の境遇から家庭教師となった女性が、自分の力で運命を切り開き、貴族との愛を貫き、幸せを掴み取る姿を描いている。

妹のエミリー・ブロンテの『嵐が丘』でも、孤児の青年ヒースクリフが登場する。このヒースクリフは、美化された描き方ではない。孤児のイメージの暗い屈折した側面を使用している。こうしたブロンテ姉妹の作品には、彼女らの境遇が反映されているものと思われる。彼女たちの母は7年で6人の子どもを産み、一番下の子の誕生後すぐに亡くなった。父親は妻の死を否定するかの

ような生活を続け、子ども達が他の子どもと遊ぶことを禁じたり、自立して家を出ていくことを禁じ、子ども全員が40歳前に相次いで亡くなっている。

『赤毛のアン』もまた、この系譜に属するものといえる。マリイ・オオドゥウ作『孤児マリー』(堀口大学訳、第一書房)は、修道院の孤児院から外界へと出て、ひとり立ちしていく姿を描いている。『ドクトル・ジバゴ』(ボリス・バステルナーク著、江川卓訳、時事通信社)では、名門の家に生まれたが、両親がなくなり、育ての親の娘と結婚した医師で詩人のジバゴが、戦場で救った女性との恋をえがいている。

イギリスの作家チャールズ・ディケンズの作品で何度も映画化された『オリバー・トゥイスト』もこれに属するものといえる。19世紀初頭のロンドンの貧民窟で、孤児院を追い出されたみなし子のオリバーがスリの少年と知り合い、スリ盗賊団の仲間に入り、やがて伯父に出会うというものである。

『リトル・トリー』(フォーレスト・カーター著和田穹男訳、メルクマール社)は、少年を主人公とした子ども向けの本である。両親が亡くなったため祖父母に育てられているインディアン少年が、祖父母から、自然のなかでインディアンとして生きていく智恵を学び、人間としての心を学んでいく物語である。

我が国でも何度もミュージカルとして上演されているトマス・ミーハン原作の『アニー』(武田信子訳、評論社)は、1930年代の不況期のアメリカを舞台にして、不幸にめげず明るく生き抜く孤児アニーが、過酷な孤児院での体験や、そこを飛び出してウォーバック氏の養女になり、幸福をつかむまでを描いている。

アストリッド・リンドグレーンの児童文学『さすらいの孤児ラスムス』(尾崎義訳、岩波書店)は、『ラスムス君を探せ』という題目で映画にもなっている。9歳のラスムスが、幸せを探して孤児院を抜け出し、アコーディオン弾きの風来坊との放浪生活のなかで、強盗事件に巻き込まれたり、歌でかせいだり、働いたりして、次第に成長していく姿を描いている。

トミー・アンゲラー作の絵本『すてきな三にんぐみ』（今江祥智訳、偕成社）も、基本的にこの流れのものといえるが、他の作品とは変わった視点から描かれる。三人組とは、黒帽子に黒マントの三人の泥棒であるが、さらってきた子どもに奪った宝の使い道を聞かれ、返事に窮する。そこで、泥棒たちは孤児の救済を始める。集められた孤児たちは、やがて結婚し、村ができ、三人組を忘れないために、同じ帽子の形の三つの高い塔を建てるという筋立てである。

アメリカ映画『パワー・オブ・ワン』は、1930年代の南アフリカを舞台として、両親を亡くしたイギリス人の少年が、豊かな大自然や、人種の軋轢のなかで、たくましく生き抜き、成長していく様を描いている。同じくアメリカ映画『モル・フランダース』は、ダニエル・デフォーの同名小説の映画化である。18世紀イギリスを舞台に、ひきとられた教会から逃げ出した孤児の女性がたどる流転の人生を描く。イタリア映画では『明日を夢見て』という作品が、戦後のシチリア島を舞台に、詐欺師と俳優を夢見る孤児の少女との愛を描いている。

コメディとして描く例もある。ステファン・シュワルツ監督の『シューティング・フィッシュ』は、孤児院育ちの二人の青年が、大邸宅の獲得をもくろんで詐欺をしかけるというコメディに仕立てている。『トム・ジョーンズの華麗な冒険』（イギリス映画）もコメディタッチの作品である。捨て子だったトムが、田舎貴族の養子として育てられるが、養父に勘当されて旅に出る。持ち前の美貌と度胸を武器に、困難を切り抜けて、最後には成功するというストーリーである。

我が国では、宮尾登美子が『天涯の花』（集英社）で、孤児の成長物語を書いている。徳島の養護施設で育った孤児珠子が、剣山にすむ宮司夫妻に引き取られ、巫女として教育される。そのなかで測候所所員や山小屋の息子との出会いなど、さらに妻がいるカメラマンとの愛などが描かれる。松たかこ主演で舞台にもなり、また、NHKでTVドラマにもなるなど、高い人気を保つ作品である。

NHKの朝の連続ドラマでも、『鳩子の海』では孤児が主人公であり、『すずらん』ではそれに

近い境遇の女性が主人公であった。いずれの作品も高い視聴率であった。

杉村春子の名演技で知られた文学座の『女の一生』（森本薫作）は、身寄りのない少女けいが、裕福な商家に引き取られ、やがてその家の嫁となり、女性実業家として成長していく姿を描く。

『ホワンの物語』（山川紘矢・山川亜希子訳、飛鳥新社）では、両親を無くした少年ホワンが、ふるさとを追い出され、一頭のロバと共に都会へでて、成功するまでを描く。著者ロバート・J・ペテロは、アメリカ社会で大富豪になった人物であり、自分の体験をベースにして、成功するための鉄則を寓話化したものである。

『ヘヴンアイズ』（ヴィッド・アーモンド著、金原瑞人訳、河出書房新社）は、孤児院を脱走した3人の子どもが、いかだで川を下り、ヘヴンアイズと名乗る少女に出会う。少女は奇妙な老人と暮らしている。現実と幻想との間の世界で、子どもたちが自分を見つめ、自己を見つける過程を描いている。

漫画でも孤児が描かれる。『みなし子きょうりゅうトム』（伊東章夫、理論社）は、連載をまとめた6巻が刊行されており、草食恐竜トリケラトプスの子どもであるトムが、友情や冒険のなかで、たくましく成長していく様を描いている。池田理代子のスケールの大きな漫画『ベルサイユのバラ』のアンドレも孤児である。

題目そのものが『オーファンズ』（孤児）である舞台作品が、根津甚八、椎名桔平らの出演で2000年に上演された。原作はライル・ケスラーという作家で、ニューヨークで1985年に初演され、映画にもなっている。役柄上中心になる3人ともが孤児院育ちで、二人は兄弟で対照的な性格である。兄は恐喝や盗みで生活を支え、弟は内気で家から出られない。根津扮する孤児院の先輩が、二人に生き方を教えるという粗筋である。

火事で両親と家を失った孤児達に降りかかる不幸を延々と描き、いつになったら幸福にたどり着くのか分からない物語は、レモニー・スニケット著『世にも不幸な出来事』（宇佐川晶子訳、草思社）シリーズである。不幸に対して結束して果敢に戦う孤児達の姿が、冒険的要素と謎解きを含んで描

かれる。本国アメリカで大人気とのことで、9巻まで出版されており、我が国でも現在6巻まで翻訳されている。

これらの作品を総体的に捉えてみると、やはり基本の性格描写は、女の子は優しく明るく、けなげであり、男の子は元気で、たくましい。そして、子ども向けの作品では、この性格要素だけで彼らは幸せに到達する。しかし、大人向けの作品ではそう単純化はできない。これらの性格に努力や才覚が加わることで幸福に導かれる主人公が描かれる。

親への思慕

孤児の自立と幸福を求める旅は、多かれ少なかれ実在なし空想の親探し、とりわけ、母親を求める心と結びついて描かれる。

この親探しを前面に打ち出した作品の代表は『母を訪ねて三千里』(エドモンド・デ・アミーチス)である。アンリ・マロの『家なき子』の放浪も、結果として母親探しの旅となっている。なお、マロは『家なき少女』(平井芳夫訳、岩崎書店)で、女の子を主人公とした作品も書いている。これは、孤児の少女ベリーヌが、苦勞の末に祖父のもとにたどりつき、幸福をつかむという筋立てである。

母親を求める心を描いた我が国の作品では、たとえば舞台の傑作『番場の忠太郎』(長谷川伸作)などがある。また、舞台や映画で何度も取り上げられている三上於菟吉原作『雪之丞変化』も、非業の死を遂げた父母を慕い、その復讐を企てる物語である。

大林宣彦監督に『異人たちとの夏』(原案山田太一、脚本市川森一、松竹映画)という作品がある。12歳の時に両親に死別し、現在脚本家である主人公が、夏の日に死別した両親と出会い、その後何度も両親のもとに通う。恋人は彼のそうした行動を止めようとする。現実とも妄想とも思えるような雰囲気の中で淡々とストーリーが展開される。

フランス映画『エルザ』では、孤児院で育った主人公マリーが、母を自殺に追い込み、自分を捨てたまだ見ぬ父親への復讐を企て、最終的には父と和解する姿を描く。アーノルド・シュワルツネッガー主演の『ツインズ』(1988)という作品は、

双子の兄弟の物語である。政府の実験で双子として生まれ、一人は孤島で頭脳も肉体も完璧に鍛えられて育ち、一人は孤児院で育つ。二人は偶然に出会い、母親探しの冒険の旅をする。

戦争と孤児

最初に掲げた児童文学のランキングに関する解説において、「ランキング上位の多くは、19世紀後半から20世紀初頭。米国の南北戦争や第1次世界大戦など戦乱の時代に、名作が生み出されたことになる。孤児を主人公とした物語が多いのも、時代背景と関係がありそう」と書かれている。戦争は大勢の孤児を生み出す。戦争と関わって描かれる孤児の作品は数多い。

リュボーフィ・ヴァロンコワ作『町から来た少女』(袋一平訳、講談社)は、ドイツとの戦争で家族をなくしたロシアの少女ワリーヤの物語である。田舎への避難の途中、一晩の宿をお願いした家のダーシャおばさんに引き取られ、笑顔を取り戻し、おばさんとの心の交流をとげていく過程を描いている。

ロバート・ウェストリールの『海辺の王国』(坂崎麻子訳、徳間書店)は、ドイツ軍の空襲で家と家族を失った12歳の少年ハリーが、独りで生き抜こうとするなかで、様々な人や出来事に出会い、生きるということの現実を知るという物語である。

映画でも孤児の姿が多く描かれた。『禁じられた遊び』の、ドイツ軍の爆撃で親を失ったいたいけな少女の姿は、私たちのまぶたから消えたい。

ラジオドラマ『鐘の鳴る丘』は、戦後の日本人の心を深くとらえた。品川博が「鐘の鳴る丘」が現実に存在するものと思い、それに刺激されて、群馬県大胡町に「少年の家」を造るという行動に結びついている。さらに品川と一緒に行動した伊藤少年は、米国に渡りコロラド州の教育長になるなどの後日談もある。

津島佑子は、『笑いオオカミ』(新潮社)において、戦後の日本社会というジャングルを十七歳の孤児院育ちの少年と母子家庭の女子中学生とが、たくましく、けなげに、すこやかに生き抜く姿を描いている。

太宰治に『メリイクリスマス』というごく短い

作品がある。舞台は終戦直後の東京で、師走の宵に主人公と親しかった女性の娘と出会う。娘の母親は広島原爆でなくなったのだが、娘はそれを言い出せない。娘は孤児であるという設定である。

爆撃で両親と二人の妹を亡くした高木敏子が書いた『ガラスのうさぎ』は、映画でもヒットした。

芥川賞作家目取真俊に『魂込め（まぶいぐみ）』（朝日新聞社）という作品集がある。これは、戦争で両親を亡くした男の魂が肉体を離れて母親が亡くなった海辺をさまよい、男をかわいがっていた婆さんが肉体に戻るよう魂込めの儀式を行うが、魂は海に帰っていくというものである。この作品集に『内海』という作品が納められている。主人公の男の子は、4歳の時に虐待する父親から一緒に逃げた母親を失い、祖母に育てられる。親しくしてくれる遠縁のおじいも、孤児として育った過去を持つ。

戦争と孤児というテーマでは、ノンフィクションの作品も数多い。たとえば、近年では、満州の収容所で孤児達の最後を見取った増田昭一が、『満州の星くずと散った子供たちの遺書—新京敷島地区難民収容所の孤児たち—』（夢工房）と題してまとめている。

孤児自身が体験を語った作品もある。たとえば、『焼け跡の子どもたち』（戦争孤児を記録する会編、クリエイティブ21）は、空襲で家族を失った14人の人々が、その後どう生きてきたかを語った証言集である。

戦時中の孤児を巡る美談を描く作品もある。兵藤長雄著『善意の架け橋—ポーランド魂とやまと魂』（文藝春秋、1998）は、第1次大戦とロシア革命のなかで親を失ったシベリアのポーランド人孤児765名が、日本赤十字社の援助で救出され、日本を経由してポーランドに戻ったという実話を描いている。

近年の民族間闘争でも孤児という犠牲者は出る。そうした孤児を描いた作品も当然出現する。たとえば、コートジボアールの作家アマドゥ・クルマは、ギニアの少年が両親の死後、生き残るために少年兵に志願し、過酷で悲惨な環境のなかで、自分さがしの旅をする『アラーの神にいわれはない』（真島一郎訳、人文書院）という作品を書いている。

戦争ではないけれども、現在、民衆が厳しい生活状況にある朝鮮民主主義共和国を描いた作品もある。『いのちの手紙』（朴善姫・朴春植著、李英和訳、ザ・マサダ）は、中国に密出国した15歳の兄と13歳の妹が自らの体験を描いたものである。

憧れとしての孤児

「親のない人は、束縛する者がいないので、自由でいい」といういささか短慮なイメージが存在する。

たとえば、向田邦子の随筆集『夜中の薔薇』（講談社）に、『おの字』と題した作品がある。親のない人が羨ましい。なぜなら、自分には母が健在なので、酒とか尻とか書けなくて、お酒とかお尻など書いてしまうから、というのである。

私は、このエッセイと高校時代のある出来事との記憶が結びついてしまう。級友が学校にエロ写真を持ってきて、みんなで回し見していたとき、「これは親のない人だ」と言った友人がいた。こんなはしたないモデルをするのは、また、こんなことができるのは親というしがらみのない人だ、というのである。

詩人で小説家である井上光晴は、自作の履歴に満州で生まれ、幼児に母に捨てられ、陶工であった父も満州で行方不明と書いている。娘の井上荒野著『ひどい感じ—父・井上光晴』（講談社）によると、母のこと以外は嘘である。彼もまた、作家として、自分を自由な存在としたかったのであろうか。

「あっしには関わりのねえこって」という文句は、笹沢佐保原作『木枯し紋次郎』の決めせりふである。この文言も、孤児紋次郎のルーツも定かでない自分という寂しさの感覚と、いつでも何からでも自由である自分という感覚の表現であるように思われる。

作品に登場する孤児たちは、預けられた家を出たり、施設を抜け出したり、旅に出る。これもその多くは、自由を象徴している。親のいる子どもが家を出たら放ってはおかれず、早晚連れ戻されるのがおちである。孤児たちには、連れ戻す人もいないし、連れ戻される場所もない。

バーバラ・チェイス・リボウ著『大統領の秘密の娘』（下川辺美知子訳、作品社）は、孤児即ち自由という暗黙の前提をもとに成立する作品である。アメリカ建国の父と言われるジェファーソンが、黒人奴隷に産ませた娘が主人公である。彼女は、屋敷を出て、父親が大統領であることを隠し、孤児として、また、白人として、自由に生きようと試みる。しかし、大統領の娘であるという事実は重すぎるといえるものである。

孤児は、両親をもつ人よりも、いち早く自立の道を歩まねばならない。生活費を稼がねばならない。頼るものがない孤児にとって、道を踏み外したり、先に進めないことは、文字通りホームレス生活に直結する。

アパートを借りること。進学すること。就職すること。いずれも保証人が要求される。保証してくれる人がいないために、自分が育った養護施設の職員に頼んで、やっと条件を満たしているというケースも少なくない。

こうした現実であるから、孤児にとっての自由は、そうでない境遇の人よりも、はるかに制限されている。

もっとも山田風太郎は、東京医科大に入学後小説を書き始めたが、祖父も父も、育ててくれた伯父も医者であり、親父が生きていたら小説などにうつつをぬかすことができず、医者になっていたかもしれない、と述懐している。

ここにみられるように、たしかに孤児であることで、自由である部分は存在するのかもしれない。しかし、それは、生活費の裏づけなど、現実の境遇に依存するのである。

心理学に「ファミリー・ロマンス」という用語がある。実の父母を本当の父母ではないと思い、本当は別なすばらしい父母がいる、と幻想することである。親に叱られた時など、少ない子どもがこのファミリー・ロマンスを体験する。しかし、親がいる人にとっては、ファミリー・ロマンスを持って、今日の前にいる父母が実の父母であることを否定できるものではない。それで、ファミリー・ロマンスは簡単に崩れ去らざるを得ない。しかし、孤児ならばこの幻想に思い切り浸ることができる。

このように、ファミリー・ロマンスを満たすものとしての孤児に憧れる面もまた、読者のなかにあるのかも知れない。

孤児が「大活躍」—推理物—

推理小説や推理ドラマほど、孤児が頻繁に登場する作品はない。とりわけ、我が国における推理物に顕著である。

孤児が登場する推理物では、謎解きが、出生の秘密の解明など、犯人と目される人物の素性の解明と重ねあわされる。これは、おそらく横溝正史の一連の作品に源があるものと推測される。松本清張の『砂の器』もこの系列に属すると言えるし、森村誠一にもこれに属する作品群がみられる。

女流作家では、夏樹静子にこの系譜の作品が多い。被害者2名、加害者2名、いずれもが孤児である作品さえある。高村薫『マークスの山』の犯人は孤児であり、宮部みゆき『模倣犯』でも、孤児が登場する。

イギリスで活躍するカズオ・イシグロの『わたしたちが孤児だったころ』（入江真佐子訳、早川書房）は、謎解きをそのまま自分探しとして描いている。9歳のときに両親が失踪した主人公のバンクスが、その謎を解くために私立探偵になって上海に戻るといえるものである。

ほとんどの局が2時間枠の推理ドラマを放映している。そのなかには、非常に頻繁に孤児が登場する。そして、その多くの場合、孤児は犯人もしくは犯人として疑われる設定である。きちんとした統計を取ったことはないけれども、その頻度はおそらく25%を超えるものと思われる。さらに、殺される役など周辺に配置された登場人物としての孤児もカウントすれば、孤児の登場率は50%に達するかもしれない。

動機の必然性としての孤児

孤児という境遇は、推理小説や推理ドラマにとって非常に便利な道具である。

まず第一に、孤児の境遇は、犯罪の動機に必然性をもたせるために使われる。

殺人を犯すほどの動機をどう作り出すか。これは推理物をつくるにおいて、もっとも困難を感じ

る部分である。親のかたきであれば、殺すほどの殺意を必然とすることができる。もっとも、敵討ち時代の話ならいざ知らず、現在、親の敵討ちとして殺人や罪を犯したという報道に接することは、皆無であるのだが。むしろ、孤児は、早世した親の分まで永く、大事に生きなければと感じる。それでも、上のような動機に、殺人さえ犯してしまう必然性を納得してしまう。

親もないたった一人の兄弟（姉妹）が酷い仕打ちをされたら、その兄弟（姉妹）の恨みをはらすほど、孤児の兄弟（姉妹）の感情的結束は固いであろう。また、施設や親戚を転々として疎まれて育てば、犯罪を犯すほど社会や人に対して十分な恨みを蓄積していることだろう。さらに、つらかった子ども時代の恨みで、必死に成功者への道を歩もうとするだろうが、後ろ盾のいない孤児の境遇で成功者にのし上がるには、その裏で法律に触れる行為をせざるをえないだろう。それだけ苦勞してつかんだ幸福だとしたら、それを守るために、容易に犯罪を行うであろう。

推理物に接するとき、こうした動機を我々は暗黙のうちに納得し、ごく自然に受け入れてしまっているのである。

状況設定の道具としての孤児

孤児の境遇は、第二に、過去との断絶および人々との断絶として便利に使用される。

すなわち、彼らは、人に言えない秘密として、孤児である過去を消そうとする。これにより、別人になりすましたりする。こうした過去の途切れた存在自体が、謎解きの課題を与えてくれる。

親や兄弟など、横のつながりも断絶される。社会のなかで、他の人とほとんど接触なく、ひっそりと生きているとイメージされる。

これは、たとえば、失踪しても発覚しにくいという利点を与える。

また、容疑者が限定されるということで、作品構成上まことに便利である。ストーリー展開のために適当な数の容疑者は必要だが、多すぎる容疑者は扱いに困るのである。

被害者としても、利点がある。殺されたり、自殺に追い込まれたりするのが孤児であれば、その

薄幸さがいつそう際立ち、読者や視聴者はそれだけ心動かされる。さらに、殺害されても死体安置所に誰も登場させなくて済む。葬式の場面も不要になる。

偏見

単に推理を楽しむだけの推理物ではなく、人間や社会をも描こうとする作家松本清張や森村誠一には、登場する孤児へのある程度の共感を読み取ることができる。しかし、もっぱら、トリックや謎解きに主眼を置き、小道具としてのみ孤児の境遇を用いる作品には、孤児である登場人物への共感はみられない。

太田忠司は『月光亭事件』（徳間書店）で、探偵の助手である12歳の孤児の少年に、次のように語らせている。たんなる道具として用いる作品に、この程度の記述を見つけることさえ困難である。

「僕、小さいときから親がいなくて、施設で大きくなったんです。初めて施設に来たときは、まわりの人がみんな怖くて、自分が何をしたらいいのかわからなかった。それに苛める子もいたし、先生のなかにも優しい人と意地悪な人がいて。僕はその時、人間って優しい人と優しくない人の二種類いるんだって、わかったんです。だから人と会ったら、すぐにその人が優しい人か、そうでない人か区別しなきゃならないと思いました。優しい人の側にいれば安心だから。でも優しい人でも僕のことを嫌いな人もいるから、いつもみんなに嫌われていないかどうか、心配だったんです・・・」

こうした内面を捨象し、作品の2割とか3割で、脚に障害を持つ人に犯人ないし犯人として疑われる役を割り当てたとしたらどうだろうか。おそらく視聴者は、障害を持つ人に対する偏見として指弾するであろう。

作品の2割とか3割に、母子家庭で育った人が犯人ないし容疑者として描かれたらどうだろうか。母子家庭およびその子どもに対する偏見として、多くの人が非難するであろう。

ところが、孤児に対しては、そうした感じ方はしない。そうした役割を与えて不自然にも感じない。おそらく、高い頻度で孤児（ないしそれに近

い境遇）が犯人ないし容疑者として描かれていることさえ、大部分の読者・視聴者は気づいてさえいない。ここに孤児に対する特別根深い偏見とイメージが表われている。

作品として楽しむこと。楽しむための効果。それを否定するつもりはない。川端康成は、『父母への手紙』のなかで、「父母への手紙とは、私にとっては、なき父母への手紙であるということが分かれば、それだけでも若い娘さんたちは、いくらか感傷的になってくれるでしょう」と書いている。この孤児という境遇が呼び起こす感傷と感情に依存し、推理物のための単なる便利な道具として孤児の境遇を使う作品作りは、安易なものといわざるを得ない。

孤児の作家

視点を変えて、孤児である作家をあげる。おそらく、多くの人が真っ先に思い出すのは、川端康成である。出世作『伊豆の踊り子』以降、川端自身はできるだけその境遇に依存しないで作品を書きたいと考えていたようである。しかし、実際にはそうした境遇の女性に彼自身惹かれるし、作品のなかにそうした女性を少なからず登場させている（拙著『門に立つ子ら（Ⅱ）—孤児の心理 川端康成における自我発達—』東京家政学院大学紀要第36号）。

山田風太郎も、作品に、孤児を強く打ち出す書き方はしていない。

村松友視は、幼時に両親が死んだと聞かされて、祖父母に育てられた。実際に父親はなくなっていたが、母親は生きていることを後に知った。

やなせたかしは、4歳のときに朝日新聞記者の父親が上海で死亡した。小学2年のとき、母の再婚のために医者であった伯父の家に預けられた。弟は先にその家の養子になっていたが、自分は養子にはならなかったため差別待遇された。週末には母親に会うなど、孤児とはいえないが、彼自身「アンパンマンには子どもの頃の出来事が強く影響しています」と述べている（朝日新聞、1995年11月15日）。

児童文学の出版社である理論社を興し、多くの作家を育ててきた小宮山量平は80歳になって

『千曲川、そして、明日の海へ』（理論社）を書き、路傍の石特別賞を受賞している。主人公が父母を失い、一家離散し、やがて東京に出てひたむきに生き、成長する姿を1030年代を舞台に描いたものである。小宮山自身、幼くして母を、小学4年で父を失っており、自伝的色彩の濃い作品である。

海老名香葉子も東京大空襲で家族を失い、孤児となった人である。親戚の家を転々としながら、けなげに生きる姿を『うしろの正面だあれ』（くもん出版）等に描いている。

西村滋は9歳の時に孤児になり、施設で育った。戦争孤児の施設の指導員を経て、作家生活に入る。『母乞い放浪記』で路傍の石大賞を受賞し、他に『地下道の青春』などの作品があり、比較的自らの境遇を表現した作家といえる。

ロシアの文豪3人も孤児である。トルストイは、貴族の家に生まれたが、幼時に両親を失っている。ドストエフスキーは、貧民救済病院の院長の次男として誕生したが、10代後半に両親を失っている。また、シベリア流刑という厳しい体験もしている。さらに、ゴーリキーは、4歳で父と死別し、9歳で母と死別している。

フランスの詩人で小説家でもあるジャン・ジュネは、刑務所で、犯罪と同性愛をテーマとする作品を書くなど、泥棒作家として名声を得た作家である。彼は、私生児として生まれ、非常に優れた成績であるにもかかわらず、孤児であったために進学できず、屈折した心を持ち、また、屈折した人生を送ったといわれる。

画家では、ゴッゲンが孤児である。成功した商社マンの地位を捨てて、早くに南の島に引っ込み、肉体豊かな女性達に惹かれたのは、母親の豊かな乳房と包み込む愛への憧憬の名残なのかもしれない。思想家では、ルソーが生まれてすぐ母を失い、少年時代に父とも別れて正規の教育も受けずに、放浪と不安定な生活のなかで成長している。

おわりに

その他、実話の映画化であるフランス映画に『人殺しの傷』と『パパン姉妹を探して』がある。両方ともパパン姉妹事件を描いた作品である。パバ

ン姉妹事件とは、1933年に召使いのパパン姉妹が、女主人とその娘を目玉をくりぬくなど、残酷な方法で殺した事件である。

姉妹は、純粋に孤児ではない。しかし、親に見捨てられ、孤児院で育った境遇である。いずれの映画も、主人と召使いという身分や、子ども時代の修道院の孤児院での厳格な教育、そうしたもの

への疑問を投げかける作品である。

本稿では、筆者の目に触れた範囲でできるだけ多くの作品を取り上げた。しかし、すべてを網羅することは不可能である。たとえば、昔話にも多くの孤児が登場するが、これらについてはまったく触れることができなかった。今後機会があれば、さらに補っていきたい。